

国語課題

1, 下記の「天声人語」(朝日新聞)について、家にある紙(ノート・ルーズリーフ・白紙等の紙)に、縦書きで正確に書き写しなさい。

2, 書き写した文章を読み、あなたが大切だと思う部分に赤線を引きなさい。

※ 授業の際に、国語の授業で点検します。

佐伯一麦：(一九五九年)仙台出身

身・仙台在住の小説家。
仙台文学館の現館長。

天声人語

作家の佐伯一麦さんは若いころ、東京で電気工として働いていた。団地の電気室やボイラー室などに赴き、作業をする。1980年代の当時、多くの現場でおなじみだったのが、防火用のアスベスト(石綿)だ▼工事のため石綿の上からドリルで穴を開けると、粉じんが部屋中に舞った。じかに吸い込み続けるうちに咳が止まらなくなり、胸を患う。石綿が原因と診断されるのはずっと後のことだ▼自分の体験に加え、医師や被害にあった人を訪ね歩いて書いたのが『石の肺 僕のアスベスト履歴書』である。危険に無策だった国によって「アスベスト禍の人体実験をされたといえるのではないだろうか」。佐伯さんの訴えだ▼被害者の救済へ大きな一歩となったのが一昨日の最高裁判決である。建設現場で石綿を吸い込んだ元作業員と遺族の主張がほぼ受け入れられ、国と建材メーカーの責任が認められた。危険を知りながら、防じんマスク義務化や危険性表示などの手を打たなかったことが問題とされた▼その「不作為の罪」が続いた期間は1975年から約30年に及ぶ。経済が優先され、働く人の健康が後回しにされた年月である。提訴からも13年がたち、何人もの原告がこの日を迎えられずに亡くなった。長すぎた空白を少しでも補う救済措置がいる▼アスベストの名は「永久不滅」を意味するギリシャ語に由来する。火や熱に強く安価な資材として高度成長期に多用され、対策が遅れた。日本経済の影の部分が問われている。